駿河台大学での３０年

星　川　　熙

1987年4月に大学が開学する直前、大学の校舎や設備をお披露目するための式典が開催された。私が大学の校舎を見たのはそのときが最初であった。そのときの鮮烈な印象は今でも強烈に記憶に残っている。その時に完成していたのは本部棟、ゼミ棟、講義棟、学生会館、体育館だけで、しかもゼミ棟、学生会館はいずれもまだ２階建であった。しかし、建物は言うに及ばず、施設・設備や調度品にいたるまで、創立者の駿河台大学を一流大学に育て上げたいという強い願いを感じ取ることができた。特に講義棟３階、４階の東側に設置された図書館は蔵書数、設備ともにすばらしいもので、現在のメディアセンターの前身としての基礎は、すでにこのときに築かれていたということを確信させるような充実さを誇っていたように思う。また、コンピュータ設備も当時の法学部のみの大学としては考えられないような充実したもので、今日のIT指向の世の中を先取りしたものであった。現在でも情報技術に対応したすぐれた卒業生を送り出し続けることができているのも創立者の先見の明があったればこそだと思う。

しかし，その後の大学を取り巻く社会情勢は厳しさを増し、バブルの崩壊とそれに続く失われた２０年、少子化の進展や大学の乱立と必ずしも創立者の期待通りには進まなかった。一時は嵐の海に浮かぶ小舟のごとく進路を見失ってしまった時期もあったように感じられたが、最近ようやく大学の進むべき進路を再び見出しつつあるように見える。それは地域に密着し、地域の力になれる大学という、一見地味な目標であるが、決して達成不可能な目標ではない。そうした目標を達成したうえで、さらなる高みを目指すなら、必ずや大学の大いなる発展が望めるであろう。

大学設立以来の３０年間、自分自身が大学にどれほどの貢献ができたかは全く自信がないが、ゼロから大学を立ち上げる現場に立ち会えたことは幸せであった。特に設立直後の熱気を、身をもって感じられたことは思い出深いものがある。大学が再びあの頃の熱気を取り戻し、新たな歩みを踏み出すことを祈ってやまない。